

リレーコラム 21

キャリアの積み方—私の場合

卒後 18 年目の 小児神経科専門医の場合

岐阜大学小児科

大西秀典

自身の人生を若かりし頃に計画を立てた通りに過ごしている方は少ないのではないのでしょうか？私自身現在のようなキャリアでまさか大学病院の講師として勤務しているとは 20 年前には予想もしていませんでした。そもそも私の父親は人口 10 万人程度の地方都市の 1 開業医(専門は消化器外科)であり、小児科医になるということ自体がまったくの想定外でありました。医師になり、研修もそこそこに実家に帰り、父親のあとを継ぎ、ポルシェでも買うかというレベルの浅はかな考えを持った 1 学生だったと思います。しかしどういわけか当時の小児科教授がソフトテニス部出身の大先輩ということで、大学病院の屋上でテニスをやることになり、そのままズルズルと小児科医になってしまい今に至ります。

当時の当大学小児科では、研修医の 2 年間は大学病院と地方の関連病院で臨床研修を行い、3 年目から大学院で研究を開始するのが当たり前で、3~4 年で大学院を終えて、数年御礼奉公してから、首都圏の有名臨床研修病院に国内留学するというのがお決まりのコースでした。私は前述の通り浅はかな人間でしたので、大学院などまったく念頭になかったわけですが、その後大学院に進むことに決めたのは、祖父の遺言によるもので、これを無視することができなかつたからにすぎません。自分の強い意思で進学したわけでもないのに、大学院での研究生活は自分歴史上もっとも暗黒時代と言っても過言ではない時期でした。しかし、“若いうちの苦勞は買ってでもせよ”とよく言われるように、暗黒時代は無駄ではなく、普通に臨床をやっているだけでは得ることのできない知識が身につきますし、英語論文を読むのは苦痛ではなくなり、そのうち週刊少年コミック誌を毎週読むかのように Nature を読むようになります。多くの若手医師が苦手になっていると思われる論文作成も、比較的抵抗無く書けるようになります。

肝心の研究テーマについて書くのを失念していました。私の大学院時代の研究テーマは、炎症性サイトカインであるインターロイキン 18 とアレルギー疾患の相関についてでしたが、それと並行して上司の研究の手伝いもしています。小児科医としてはかなりニッチな分野ですが、上司はタンパク立体構造の解析を行う研究をしていたのです。大学院修了前の 2002 年秋、私は新たなテーマを与えられタンパク立体構造解析の研究を行うため、横浜市立大学の白川昌宏教授(現京都大学教授)のラボに国内研究留学することになりました。憧れのポルシェライフが遠くともあり、当初は抵抗がありましたが、横浜という都会での生活を満喫できるかも、という甘い誘惑につられて行ってしまったわけです。そこからが第二の暗黒時代の始まりでした。私に与えられたテーマは MyD88 という分子の立体構造解析でした。構造決定までなんと約 4 年、論文完成までさらに 2

年かかっています。ほぼ大学院に2回行ったのと同じですね。上司の研究も開始してから7年で論文になったと言っておられたので、構造解析研究はつくづく大学院生殺しの研究だなあと実感したわけです。

途中なんども投げ出しそうになりましたがこの研究が転機になりました。2008年にMyD88欠損症という新しい原発性免疫不全症が発見されたのです。この疾患概念も含めて論文発表し、その後厚労省からIRAK4欠損症(MyD88欠損症の類縁疾患)の研究班を組織する研究費をいただくことができました。同様に自然免疫の異常で引き起こされる自己炎症性疾患にも興味をもつようになり、現在京都大学小児科の平家教授が主催されている研究班にも参画させていただいております。

以上の経緯から、私のことを知っている先生方から専門はアレルギーかリウマチかとよく誤解されているのですが、実は私は小児神経専門医なのです。普段の診療で担当している症例は、だいたい免疫異常と神経疾患で半々の状況です。というわけで、自分ではまるで某有名ファンタジーRPGの赤魔道士(黒魔法と白魔法の両方のある程度のレベルまで使えるというアレです)のようだなと感じている次第ですが、地方の最終病院を守備している以上、いつまでも“ある程度のレベル”で、というわけにもいかず両方の道でレベル99を目指したいと思っています。この原稿を書くにあたり客観的に俯瞰してみても、改めて思うのは人様や状況に流されすぎか?と思わなくもないわけで、ポルシェライフは遠のきました、これからも研鑽を積んでいく所存です。

おおにし ひでのり
大西 秀典

岐阜大学医学部附属病院 小児科講師

平成 10 年、岐阜大学医学部卒業

平成 15 年、岐阜大学大学院医学系研究科修了

平成 14 年秋より横浜市立大学大学院生体超分子システム科学専攻にて構造生物学に関する研究に従事。

平成 18 年より岐阜大学に戻り、平成 27 年より現職

専門領域：小児科, 小児神経, 免疫学, 構造生物学

男女共同参画推進委員会より

日本小児科学会では、2002年に小児科女性医師の働く環境改善委員会を設置し、2003年に女性医師の職域での環境改善プロジェクト委員会、2012年に小児科医ワークライフバランス改善ワーキンググループ(小児医療委員会内)と形を変えながら仕事を継続していく上で困難を抱えている女性医師の支援に取り組んで来ました。2014年には現在の男女共同参画推進委員会が設置され、性別や年齢、あるいは子どもの有無にかかわらず、それぞれが仕事とプライベートのバランスを取りながら小児科医としてキャリアアップしていくことができるような社会を目指して活動してきました。その取り組み内容をみなさまに知って頂くために、各地方会でワークショップなどの企画を行うこととなり、まず2018年3月に近畿小児科学会で開催されました。今後他の地方会での企画が続きますので、ぜひご参加ください。
